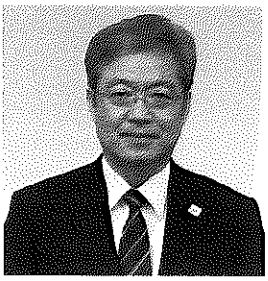
令和２年度医療連携推進講演会

感染症・非感染症への歯科からのアプローチ



鶴見大学歯学部探索歯学講座

教授　花田　信弘

歯科医療と口腔保健の目的は歯の喪失の防止、口臭の防止とともに口腔の有害菌の体内への拡散防止である。口腔には多くの微生物がバイオフィルムを形成して生息しており、その中には有害菌も多く含まれている。口腔で増殖した有害菌は１）唾液とともに毛細血管から血管系に侵入する循環器系の経路、２）口腔・咽頭から下気道へ侵入する呼吸器系の経路および３）嚥下により胃や腸管に侵入する消化器系の経路によって口腔外に拡散し、多くの臓器に障害を与えている。平時においては、口腔で増殖した微生物の口腔外への拡散が糖尿病、認知症、がんなど非感染症のリスクになることが問題になってきた。

一方、現在の緊急時つまり新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行下では、口腔で増殖した有害菌の口腔外への拡散がこの感染症の発症や重症化に関わっている可能性が出てきている。新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）が人に感染するためには受容体とタンパク質分解酵素の２つが必要である。この条件が揃っている臓器は呼吸器だけではない。唾液腺や口腔粘膜あるいは腸管など消化器にも SARS-CoV-2 の侵入路が存在する。初期に唾液腺や口腔粘膜に感染した SARS-CoV-2 は口腔粘膜細胞内に侵入し、増殖する。口腔で増殖した SARS-CoV-2 は口腔の有害菌とともに上記３方向の経路によって唾液や血液を介して拡散し、COVID-19 の発症と重症化を引き起こす。

また、飛沫等による口腔外への感染拡大を唾液が担っているので、口腔清掃により唾液中のウイルス量を低下させることは社会全体への感染拡大を阻止するという公衆衛生学的な意味もある。

医歯薬等医療職種間の連携の促進に関する本事業では、歯の喪失の回避という視点ではなく、非感染症と感染症の１次予防の視点から歯科医療と口腔保健の重要性を解説したい。

【講師略歴】

現職：鶴見大学歯学部探索歯学講座教授

1981 年　九州歯科大学歯学部　卒業

1885 年　九州歯科大学大学院歯学研究科　修了

1985 年　九州歯科大学歯学部　助手／講師

1987 年　米国ノースウェスタン大学医学部微生物・免疫学講座　博士研究員

1990 年　岩手医科大学歯学部　助教授

1993 年　国立感染症研究所　口腔科学部長

2002 年　国立保健医療科学院　口腔保健部長

2008 年　鶴見大学歯学部　教授　現在に至る。

1999 年～2000 年厚生労働省「健康日本２１」計画策定委員を務める。

現在、日本歯科大学客員教授、明海大学大学客員教授、東京理科大学光触媒研究センター客員教授、長崎大学、東京医科歯科大学非常勤講師を併任。日本口腔感染症学会理事、日本バイオフィルム学会理事。